

Title	回想七十年
Sub Title	Memoir ; 70 years
Author	橋本, 孝 (Hashimoto, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1965
Jtitle	哲學 No.46 (1965. 2) ,p.E1- E31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	橋本孝先生古希記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000046-0549

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

回 想 七 十 年

橋 本 孝



孝
橋
本

北 沢 楽 天 画

まえがき

今回三田哲学会では、私の古稀記念のために特輯号を出してくれると云うことであるが、率直に云つて、自分としては内心甚だ忸怩たるものを感じざるを得ないのである。

成程私は、大学予科時代から三田哲学会のため使い走りをしたから、本会に関係してから、かれこれ五十年になるかも知れない。その点からすれば、或は現役では一番の長老株であろう。しかし私はただそれだけのことであつて、別段会のために特別な功勞があつた訳でもなく、学究としても、事志と異つて、これが自分の業績だと自信を以て断言出来るようなものは、何一つ残つても居らず、碌々として徒らに七十年の歳月を空費してしまつた感がある。従つて、かような企ては一切御無用に願ひ度い、とお断りすべきが当然であつたかも知れないのであるが、敢てそういうこともせず、ズルズルべつたりお受けするに至つてしまつたのには、自分ながら身の程知らぬ恥知らずだと赤面せざるを得ない。

しかし、これも見様によれば、これ程光榮にして且つ有難いことはまたとないであろう。しかも執筆者は、予定をはるかに超過して、三十名近くの同僚友人諸君の温い友情の発露とも云わるべき論稿が集まつたということを知り、只々感謝の念を禁じ得ない次第である。

1

元来私は、少年時代、将来は作家になる積りであつた。今から考えて見ると、まことに噴飯ものだが、何時の間にか志望が一変して、大学予科に進むときは哲学科を選び、今日のような状態になつてしまつたのである。

私の生れ故郷は、日光線の鹿沼に近い酒野谷という一寒村で、農業構造改善が叫ばれている今日と雖も一向に変わり榮えせず、旧態依然たる村落である。私はかような田舎に、日清戦争の終つた年、即ち明治28年(1895年)2月14日に生れたのである。この部落は、今こそ鹿沼市に編入されて一日数回バスなども通つているが、街の中

心から一里近くもはなれ、遙か北西の彼方には、日光や白根の連山が山波をなしているのが眺められ、古峰ヶ原辺りを水源とする大芦川が近くに流れている百戸足らずの農村なのである。

伝説によれば、橋本家は、昔楠木家の一族が遠く逃れて当地に住みついた豪族で、幕末から日光県頃まで、即ち祖父亦造の時代までは近隣十八カ町村の東ね役たる大庄屋を代々つとめて来た旧家であつて、父は分家から這入つて家督を継いだ久三郎と云い、母は三里程日光街道を今市よりの小代の素封家、加藤弁造家の長女タケであつた。

父は分家から養子になつたと云つても、橋本家の血を受けついで、何れかと云えば親分肌のところは抜けきらず、人情にもろくしかも浪費家で、私が幼少の頃には、その時分では非常に珍らしかつたコースター附の自転車でよく東京へ行つたり、或は競馬の馬に熱を上げて、いろいろな馬を買い入れては自慢していたのを覚えている。かような性質の父であつたから、われわれ子供に対しては時に非常に厳しかつた半面、溺愛と云つた方が適當である様な可愛いがり方であつた。けれども、父は固疾のため薬石効なく昭和8年9月9日、岡町の長兄の宅で長逝した。享年七十三、成就院興運持久大居士というのがその戒名である。

しかし母の方は、小代の系統を受けついでいかに、物事に対して飽くまで合理的で、主婦としての家政の切廻しも巧みであり、われわれ子供達を愛するにしても、一見理性的と思われる程冷静に見えていて、よく味つてみると、心の奥底から滲み出る様な何んともいわれない温か味のある人柄であつた。

私の家は明治の中頃までは、裕福な暮らしをしていたそうであるが、治水事業や其他のことに無計画に注ぎ込んで、一つ売り二つ売りして相当な田畑や山林の大半は、何時の間にか高利貸の手に渡り、かような祖父や父などの野放図なやり方に、母はよく泣かされたものだそうであるが、陰になり陽になり、よく嫁として妻としての役目を果たし、今日に至るまで、なんとか橋本家の面目を保持して来たのは、一つに情理兼備の母の賜と云つてよい。しかし惜しいかな母も亦終戦の昭和20年3月27日、大阪から故郷の家に帰り着いて間もなく、安神したせいか八十五才の天寿を完うして大往生をとげた。成性院竹宝貞倫清大姉というのが法名である。

従つて私の夢に出て来るのは、いまだに何時も変らぬ母の慈味溢るる温顔であつて、戦前岡町の長兄の宅で母の「喜の字」の祝いをした朝、何気なく弟が撮つた写真を引き伸ばして額に入れ、今でも私の居間に掲げ、朝となく夕となく眺めては、ひそかに自分の「心のいましめ」としている。

私は戸籍上からいえば七男一女の四男であつたが、女一人と男二人は夭折してしまつたので、私が物心づいてからは、兄二人の弟二人、都合五人の男ばかりの兄弟の真中として育てられたのであつた。私は幼少の頃から腕白の方であつたので、五千余坪の屋敷の中を、近所の悪童達を大勢引きつれ、餓鬼大将になつて、いろいろ悪戯をしながら遊び廻つていたから、生傷の絶えたことがなかつた。或る時は大勢で座敷の廊下を跳ね廻り、祖父の山高帽子をフットボールのようにけとぼしたり、踏みつぶしたりして遊んでいたら、大目玉を頂戴して平あやまりにあやまつたことをいまだに夢に見ることがある位で、小学校の一年の秋には、大木の幹から落ちて左腕を折り、半年余りも千住の名倉に入院したりして療養したこともあつた。

その頃の学校制度は、今と異つて尋常小学校四年、高等小学校四年、しかし中学へは高等小学二年を終了すれば受験出来ることになつていた。そして中学五年を経て高等学校から大学へというのが常道であつたのである。

私の郷里の酒野谷尋常小学校は、田舎としては珍らしく古い伝統のある学校であつたが、児童総数は男女合せてようやく百名足らずで、先生は校長を算入しても三人に過ぎなかつたので、いわゆる複式授業を行わざるを得なかつた。

私はかような変則な教育を受けてここを卒業すると、隣村の比較的完備した南摩村高等小学校に入学することになり、担任の国語の先生の影響を受けて文芸作品に興味を持つようになり、帝国文庫や秀才文壇その他手に這入るいろいろの文学書や文芸雑誌を探し求めては、蔵の中にかくれて読書に熱中するようになった。

やがて読書だけでは我慢が出来ず、ひそかに秀才文壇に投稿すると度々掲載されるようになり、そうなるに益々面白くなつて、学校の授業の方はそつちのけにして一層興味を持つようになった。

しかし何時迄でも高等小学校にいる訳でなく、二年生の終りには担任の先生にすすめられるまま、県立宇都宮中学校の入学試験を受けてみたところ、同校からは私

だけが首尾よく合格したので、其後は親元を離れて、宇都宮の叔母の家に寄寓し、滝の原の中学校へ一里近くの道程を風雪もものともせず、愉快に通学したものである。当時の同級生のうちには、現在の衆議院議長の船田中氏なども居られたように記憶している。

けれども翌年春になると、文章世界や秀才文壇の記事に刺戟されて、将来ひとかどの作家になるためには一日も早く東京へ出て、然る可く修業するのが一番近道であるかのように盲信し、居ても立つても居られない様な焦燥感に駆られて、自分にその才能があるかどうかも考えることなく、尤もらしい口実をもうけて両親を説き伏せ、ひそかに従兄の加藤武男氏の口添えにより、塾の同窓の友人で東京築地に俳書堂という出版商を經營する初山仁三郎氏の許に身を寄せ、使い走りやその他のことをやりながら、何時の日か自分の志を貫徹しようとしたのである。

初山氏は、知る人ぞ知る、単なる一書店の主人ではなくして、根岸派の流れを汲む名ある俳人であり、随筆家であり、趣味の洵に広い見識のある文学者なのである。商売の方は、いわば道楽で営んでいたようなもので、内部から見ていると、本家や親戚の者に対する一種のカモフラージュのようにも見受けられた。交際はいわゆる文人墨客が多く、まことにおだやかな人柄の持主で、しかもしんの強い、それでいて思いやりの深い方であつた、

永井荷風が、この初山氏の人柄について、大正4年9月号の三田文学に、同氏著の「遅日」の合評会の際に回顧して、三田文学創刊に関しその販売の件について、塾の石田幹事に始めて三田の東洋軒で紹介されたときのことから説き起こし、次のように述べているのを見れば、氏に関し私の云わんとするところを余すところなく代弁してくれていると思われるので、少しく永過ぎる嫌いはあるかも知れないが、ここに敢てその大半を引用することを許して頂き度い。即ち、『庭後子(初山氏の雅号)はその時初対面の礼儀を重んずる為めか、紋附の羽織に仙台平の袴をはいて居られた。年の頃は三十五六とも覺しく、言語態度の非常に礼儀正しく沈着温和上品なる事が、私の目には察る不思議に感ぜられた。私は、初山氏に向つて先づ三田文学は飽くまで売れない雑誌にした方がよい、なまじ雑誌が売れると文学も金儲の手段だなどと誤解されないものでもない。それは吾等のみならず文学一般の為に

甚だ迷惑な事であるからせいぜい非商業的にやり度いものだと語つた。すると初山氏は結構ですと云はれて製本や紙を出来るだけ贅沢に見積りを立てた。

私は初山氏が江戸庵といつて子規派の錚々たる俳人であることを少しも知らなかつたのである。文学に関する事凡て一言云へば直様互に意の通じてしまふのも尤もな訳である。夏目漱石氏の有名な「吾輩は猫である」の小説の如き嘗て庭後子が俳席を築地の庭後庵に開かれつつあつた時分に漱石氏も出席して之を朗読されたのだといふ事である。初山氏は一方慶応理財科の出身たると共にその文学的方面に於ては根岸派の立派な俳人である。氏は焦門の杉風が魚屋であつた様に、一方は飽くまで昔風の商人たらんとし、同時に文学を愛好せんとして居る。商と文とは初山氏に於ては決して矛盾しないものである。

三田文学が初号発行以来こゝに六年、初山氏があるが為めにその發達に利するところが多かつたのは云ふまでもない事である。慶応義塾の内部の或者は初山書店は三田文学のために利益を得て居るとばかり思為し毎号自家の広告手段にのみ之を利用してゐるとなすものがあるが事實は全然反対である。初山氏が文学を愛好する風流あるが為め、三田文学は六年間絶えず内部からの苦情があつたに係らず今日までどうやらかうやら俗化されずに最初の面目を保ち得ているのである。具体的に云へば中央公論や実業の日本の体裁に模倣するのを免れ、僅に文学専門の雑誌となり得てゐるのである。初山氏が若し利のみを欲する商人であつたならば何ぞ三田出身の新進作家の作品を単行本として出版するやうな愚をなす筈がない。若し三田文学が一時的なりとも文壇に向つて或新刺戟を与へた事があつたとするならば、私はその功績の大半を初山書店に帰すべきものと信じてゐる。初山書店は主義なく方針なき普通の出版書肆ではない。吾人は仏国詩壇に於けるパルナス派の詩人の運動を知るに当り、此の新派の詩家を多く世に紹介した書店の主人アルフォンス・ルメールの在つた事を記憶せねばならぬ。蜀山人や京伝を知つてゐた江戸の地本屋蔦屋重三郎は飽くまで当時の作者を了解し又最眞にした出版商であつた。出版商であると共に一面に於ては戯作者であつた。狂歌師であつた。私は初山書店の主人庭後子をば恰度さう云ふ風な出版商である様に思つてゐる。

いかに円満な人物とて、世に立つ間は到底一部のものから誤解される事を免れな

い。初山氏は温和過ぎる位な好人物であるが然も常に誤解されてゐる。氏嘗て世に文学を保護するもの少きを慨嘆し紳士紳商が一夜酒食に投ずる錢を節して之を文学に投ぜば非営利的なる絶好の出版物を得ん事甚容易ならんと語られた。然るにその当時「人生と表現」といふ雑誌に關係せる塾内の某子直ちに之を誤解してあらぬ噂を書き立てて喜んだ事があつた。初山氏は爾後それらの誤解をいまはしき事に思ひ多く語らざる人となつた。氏は今の世の中には弁解もまた駁論も全く無用である事をよく知つてゐる。そして静かに沈黙しながら甚しく激することなく平然としてゐる寛容な人である。私は氏の平常を見るが毎にそぞろ欽慕の念なきを得ないのである。』(岩波書店版、永井荷風全集、第13巻、初山庭後、159-162頁、参照)

かような人柄の初山氏は、私がひそかに文章世界や万朝報の懸賞小説に応募し、幸い文章世界には一回だけ当選したのを耳にした訳でもあるまいが、陽春の或る日、私をわざわざ庭後庵の茶室に招致し、私の志や両親の意向などを根掘り葉掘り問いただした後、今後ひとかどの文学者になるには如何に困難であるか、それには天分は云うまでもないが、先決条件として相当の学問を身につけて置かなければならない。それ故学位は是非出て置く必要がある。君がそれ程強く志望するならば、将来果して志望通りに行くかどうかは分らないが、ともかく明日にでも慶応の川合先生に紹介状を書いて上げるから、普通部から大学を卒業するようにし給え。どんなことでも相談に乗つてやるから、ということになつて、私は翌日早速部厚い添書を貰つて、川合先生の居られる三田山上の普通部教員室を御訪ねしたのであつた、校舎の入口の傍らにあつた老木の桜花は爛漫と咲き乱れ、やや盛りを過ぎた花びらが微風に誘われて、ハラハラと散る風情ある景觀を、五十数年後の今日でも目の辺りに憶い浮べることができる。

川合先生は早速巻紙で書かれた例の添書を読み了ると、編入試験というか、テストというか、恰度第一時限を終つて教室から帰つて来られた英語の佐々木義宜先生と数学の岸田先生に何やら耳打ちされると、二年と三年の教科書から夫れぞれ二・三題の問題を指定され、「正午の鐘の鳴るまでにやつて置き給え」と云われたので、一時間足らずで両方の答案を書き了つて、両先生の帰つて来られるのを今や遅しと待つていたことを今でも覚えている。

佐々木先生は、教員室に這入つて来られるやいなや、答案に目を通し、すぐさまリーダーの巻の三を開かれて、「ここを声を出して読んで訳して見給え」といわれたのでその通りすると、岸田先生とお二人で川合先生に何やら報告されたのでしょう。川合先生から「君は今の学力から云えば三年生としても差支えないが、宇都宮中学は一年修了だということだから、まあ二年生で我慢するさ。明日からでも授業に出なさい。」と至極あつさりしたお話があつたので、その旨庭後庵主人に報告して、翌日から毎日通学することになつたのである。

従つて、私の今日あるは全く庭後庵主人のお蔭であつて、物心両面に亘る生涯の大恩人と云わなければならない。氏は後に梓月と号し、多くの句集や随筆集などを刊行していることは周知の通りであるが、当時としては珍しい株式売買に関する理論と実際を取扱つた「株式売買」と題する著述を本名で出版し、しかも洛陽の紙価を高からしめたことは、余り知られていないかも知れない。

永井荷風との交際は、荷風が築地一丁目の露路奥に寓居を構えた当時が最も親密であつた模様であるが、梓月氏が後に新富町の数寄屋造りの邸宅を引き払つて、鎌倉扇ヶ谷の寿福寺境内に山荘を求め、悠々自適の生活をして居られたときも、つまらぬ誤解から時には親疎の起伏はあつたとしても、明治43年から大正昭和の終戦後までも続いていたといつて差支えあるまい。俳諧書以外の出版物の時用いていた初山書店の商号が、米刃堂とも称せられるに至つたのは、荷風の巖君禾原氏が初という字を二字に分けて米刃堂と命名したのが始まりであり、荷風の「断腸亭襍稿」の巻頭に収められた「断腸亭の記」は庭後隠士の友情の、まごころを吐露した名文であつて、両者の交友の程度を示す好箇の証左であると云つてよからう。

梓月氏は鎌倉に隠棲後も板倉博士等の懇望もだし難く、時事新報の常務取締役となり、或は実費診療所の常務理事まで引受けたのであつたが、かような方面は余りお得意ではなかつた様に見受けられた。天は久遠の寿を仮すことなく、氏は遂に病にたおれて、昭和33年4月28日、八十歳の生涯を閉じられたのであつた。悟本庵梓月居士の法名は、氏の如何にもつつましい全生涯を遺憾なく道破して余すところがないと云つてよい。

私は特に自分の空々漠々たる七十年のこし方を顧みて慚愧の念に堪えず、この機

会に更めて梓月居士にお詫びをするとともに、在りし日の洪恩に謝意を表し、併せて居士の御冥福を心から御祈り申上げ度い心持ちを禁じ得ないのである。

2

その頃の普通部は、普通の意味の中学校ではなく、教科書は、多く英文のものを用い、塾独自の教科課程を組んで居つて、公立の中学校とは大分趣きを異にしていた、今で云えば、各種学校の一つであるが、受験資格や何かは中学校並の認定扱いを受けて居つて、高等学校受験にも差して不便は感じなかつた。しかし他校からの転入学などは割合寛大であつたし、教員や生徒にも相当の傑物が居つて、今の普通部とは大分調子が異つていた。それに体操の如きも、大部分は兵式体操であつて、独特の生徒隊組織を持つて居つたことは、特記に値する点であろう。

加之、現在と異つて呑気なよき時代であつたから、裏表と丁寧に繰り返していた生徒も居つたから、年齢や学力の点に於ては、格差が大分あつたように記憶している。私自身なども、年齢の点では、幼稚舎から真すぐに進学して来た連中に比較すれば、二年位年上であつたし、普通部に這入る前には、一晚おきに家庭教師について、英漢数の如きは優に中学三、四年以上のことを一応履習して来ていた関係上、同級生諸君は一般的に見ると余りに子供らしく、それに英語などは易し過ぎて面白くなく、沢木四方吉先生に特にねがつて、オスカー・ワイルドの「サロメ」などを使つて教科書代りに読んで貰つていたこともあつた。従つて授業の方は下調べもせず、少々復習でもして置けば結構好成績を取めることが出来た。それ故、暇さえあれば自然派であろうが、新浪漫派であろうが手当たり次第文芸作品を乱読したり、仲間の連中を誘い合せて、遠く本郷の壱岐殿坂の近くにあつた教会の文芸講座などへも出かけ、戸川秋骨先生のドストイエフスキーの英訳や沼波瓊音の「實在」に関する独自の哲学的解釈などにも興味を持つようになった。また学習院から転学して来た松平伯の次男坊で、英語の頗る達者な松平喬君とは齢も同じ位であり、よくうまがあつて遊びに行き、エルマンやサラサーテなどのレコードを聴きながら、夜の更けるのも打忘れて遊び呆けたものであつた。かつてハーバード大学の東洋学部長な

どもしたことのあるエリセーエフ氏が東大留学中、よく松平の家へ遊びに来ていて、下町のべらんめい言葉を得意になつて聞かせてくれたのもその頃であつた。

一方千葉君達ともよく連れ立つて、歌舞伎は勿論、新劇勃興の時代であつたから、毎月少くとも三つ四つの芝居を観て廻らなければ気が済まない有様であつた。

今でも出ている普通部会誌は、私の三年生の時、五年の久保君、四年の御手洗君達と相談して創刊したもので、私は「バーナード・ショウの改作劇」についての劇評のようなものを生意気にも永々と書いて得意になつていたものである。現在御手洗君は政治評論家としても大いに活躍しているが、その頃から老成した感じの持主で、文章も達者であり、雄弁家でもあつた。雄弁家と云えば、首相候補の藤山愛一郎君も弁論部員であつたし、松本信広君もそうであつた。但し是等の諸君とは何時もクラスは別で、僅かに奥井復太郎君とだけは、大抵同じクラスであつた様に覚えている。

とにかく、普通部時代の私は、軟派の一方の旗頭かのように誤解され、兎角生徒監の先生には白眼視された傾向があつたが、川合先生には会誌の編輯余録に時の奥田文相に抗議めいた記事を書いたことに端を発して、呼び出しを喰つた程度であつたように記憶している。

私は普通部三年生となつてから、三田山上にあつた寄宿舎の清交寮に這入り、大正6年秋、新寄宿舎が天現寺橋畔に移つてからも卒業するまでここに居り、前後八年の永い寄宿舎生活を文字通り満喫した。その頃の寄宿舎は、いずれも六寮に分れ、それぞれなにがしかの特徴を持つていたもので、全く学生の自治組織で運営され、一騎当千の若者達の集りだけあつて、時にはつまらぬ騒ぎを起すこともあつたが、塾長や舎監の先生方を初め、各方面の先生方とも親しく話し合う機会が多かつたので、少くとも私一個に関する限り、ひとたび寄宿舎生活に馴染むと、到底下宿生活では味うことの出来ないよさが分り、知らず知らずの間に人間も練れて来て、思わざる友達も沢山出来るようになる。かような点から見ても分る通り、学園に於ける寄宿舎なるものは、人間育成の面から見ると、此上もない有意義にして大切な教育機関であると云わざるを得ない。それ故、本塾では出来る限り速やかに教育方針にふさわしい立派な寄宿舎を再建拡充する必要があるのではなからうか。

その頃の舎生は、大抵何等かのスポーツをやっていたものであるが、私は普通部以来如何なるスポーツにも関係したことがないのであるが、友人には割合に体育会関係者が多く、柴田一能先生が退職後、柔道部長といういかめしい名前を受継いでから早くも30年近くになるが、それも或は私が寄宿舍生活をしていたせいかも知れない。私が不思議に体育会の学生諸君に親しみを感ずるのも、或はかような関係のためでもあろうか。

私は寄宿舍へ這入つてからは、出来るだけ図書館を利用して広く内外の思想関係の書物を読むようになり、又普通部三年から四年にかけては、同好の士数名とともに、放課後教員室に集り、川合先生を囲む会合を持ち、いろいろ泰西の文化や思想の動向などについてお聴きする機会を得たことを今でも懐しく思っている。尤もこの間と雖も、決して小説や芝居に興味を失つた訳ではなく、四年生か五年生のときか今は一寸はつきりしていないが、ウィッカーズ・ホールの小山内先生の近代劇に関する講義をひそかに聴講させて貰つたところ、恰度自由劇場で台本に使う「夜の宿」の校正刷をテキストと比較しながら、例の名調子で読み上げつつ、遠慮会釈なく和辻氏の下訳をこき下していたのを今でも覚えている。この時にも故人になつた猿翁が猿之助と云つていた廿二・三歳の頃、紺がすりに袴をつけて聴講に来ていたのを見かけた。小山内文庫は勿論のことであるが、最近小山内先生の胸像が歌舞伎座から三田山上に移置されるようになったのも、かような因縁から当然と云つて差支あるまい。

ところが私は、五年を卒業する時分には、あれ程熱烈な作家志望であつたにも拘らず、全く心境に変化を來たし、大学予科へ進学するときは、両親や初山氏や加藤氏等の関係者達に相談して見ると、みな異口同音に理財科へ這入り、将来は実業界へ進む方が得策であろう。と忠告してくれたのであつたが、結局自分の考え通り、文学科哲学へ進学することにしたのである。当時の哲学の予科は、他学科より数学を余計履修する必要があつたので、最初から區別して取扱つていたのである。このやり方は、今から顧みても、なかなか味のある制度であつたように思われる。

当時の文学科は、哲、史、文の三学科に分れ、予科二年の本科三年、都合五年で卒業することになっていた。学生数も全体で百名余りで、純文が一番多く哲、史関係は極めて少なく、予科一年だけが何時も全体の三分の一位いたような気がした。

特定の教員(その頃はまだ正式の「教授」組織が出来ていなかったようである)以外は、予科や本科の授業を兼担するようになっていて、本科になつても各学科共学科課程に相当の幅があり、殊に哲学科の如きは、純文学科との共通科目が可成あつた。例えば英語英文学では、野口米次郎、戸川秋骨、畑功、大陸文学では馬場孤蝶、独文学では小宮豊隆、茅野蕭々、仏文学では永井荷風すでになく、広瀬哲士僅かにお一人、文芸評論は阿部次郎、漢文学は内田周平、独語学は向軍治の諸先生という具合であつた。

ところが、時の文学科長の川合先生は、八面六臂の大活躍振りで、学年によつては、哲学、心理学、論理学、倫理学、社会学それから独文学すらも担当された程であつた。年次の進むにつれて漸次二・三科目に制限されるようになってきた。私にとっては、川合先生は、普通部以来本塾を退職されるまで、永年に亘る、忘れることの出来ない恩師であつたばかりでなく、関東大震災の年、田中萃一郎先生の急逝により、ヘルデルの「歴史哲学」下巻の下訳を仰せつかり、半年余り並々ならぬ苦心をしたが、今から願つて見ると、後々の勉強のために、非常に役に立つたように思われた。加之、先生が多忙のときは、比較的通俗雑誌の哲学論文の場合には私が代筆したことも二、三回に止まらなかつた。かように先生には公私共に特別の御厄介になつたものであるが、決して弟子達を自分の型にはめ込むようなやり方をせず、あくまで本人達の個性を尊び、余り研究の上でも干渉がましいことはしない性格の方であつた。但し、翻訳に関する限りは、御自分の気に入る迄何回となく朱筆を入れて訂正することを止めなかつた。一面から云えば、非常に几帳面で、物事に徹底せずんば止まぬ気概を持つて居られた証拠であろう。

ところが、哲学やゼミナール担当の鹿子木員信先生は、海軍将校の前歴の示す通り、極めて厳格に授業を行い、自分の思う様な哲学的思考方向に引き入れねば置か

ぬという様な具合に努力されたことがよく覗かれた。実を云えば、真に哲学することに私の眼を開いてくれたのは、先生がプラトンの「国家」篇を独訳のテキストを用いて行つてくれたゼミナールからであつたと云つても過言ではない。予科時代にも科外講座として、プラトンのパイドンや何やかやを読んで貰つたものであるが、本科の必修科目としてのゼミナールは、私の一生忘れることのできない深い感銘を受けたものであつた。

その頃の哲学の同級生は、卒業後六、七年で病気のため早逝した草野次彦君と他一、二名に過ぎなかつたが、毎回出席するのは草野と私の二人だけであつて、此の外東大の大学院生が何時も二、三名づつ個人的に許可を得て陪席の形式で出ている程度であつた。しかもゼミナールのやり方は、全く独逸式で、指定された箇所を参考書と照合してよく調べて置かないと返答が出来ない有様で、一回一人10頁から20頁近く進むかと思えば、重要問題に突当ると、同じ問題を一、二週間ぶつ通して質疑応答するという具合であつて、大体先生のプラトン解釈は、当時流行の新カント派のマールブルク学派の夫れに近いものであつたように記憶している。加之、先生の質問は微に入り細をうがつ場合と哲学上の根本問題にふれるのと両方の場合があるので、所定の時間がきれるのが待遠しく感じたことも一再に止まらなかつた。従つてその準備も相当時間を要し、よく図書館の星享文庫の厄介になつたものである。

ある日、ゼミナールのあるとき、風邪のため寄宿舍の寝室で寝ていると、突然戸をノックして先生が這入つて来られ、「将来哲学者になろうと思う者が風邪などひいてどうする。哲学者は、肉体的には鉄人でなければならん。須らくかのソクラテスを見習い給え。今日は草野も休んでいるから、ここでゼミナールをやろう」と云われて、私は渋々ながらベットの上に起き上つて一時間程やつたが、それが因で一週間程寝込んでしまつたことを今以て忘れることが出来ない。

先生は一面また登山家で、その関係からか榎有恒君などもよく先生の講義の時には傍聴に来て居られた。先生は、大雪の降る中を、海軍将校風の濃紺のフードの附いた外套にステッキ姿で、三田山上を濶歩されてたのを今以て覚えているが、先生は一種のポーズを尊び、特異な哲学的雰囲気を発散させるところからか、若い御婦人連中の崇拜の的となつて居つて、私の一年上級の村岡省五郎君の恩人沼田笠峰氏

夫妻の斡旋で、目黒の三田に先生を中心とする「哲学談話会」なるものが結成され、私共も村岡君に誘われてよく出席したものであつた。出席者は、例の御婦人連中が圧倒的多数であつたことは云うまでもない。その時の先生は、恰も新興宗教の教祖様のような取扱いを受け、大変な御気嫌であつた。昭和2・3年の頃、私がドイツ留学中、ベルリンの或る街角で偶然先生にお目にかかり、十分程立ち話しをしてお別れしたのが、最後になつてしまつた。当時の先生は、慶応から京大を経て九州大学の教授になつて居られて、政府の交換教授の使命の下に、日本文化研究所長として赴任されて来られていたのであつた。私が大正12年の頃「プラトン倫理学説の研究」と題する著作を哲学研究会から発行することになつたのも、直接間接に先生に関連して居つたことを後になつて聞かされたものである。

さて、西洋哲学史であるが、ヘーゲル研究家を以て自任して居られた小山鞆絵先生であつて、東洋哲学は、初め木村泰賢先生であつたが、後には認識論的に非常に緻密な講義がお得意であつた宇井伯寿先生に代られた。此の外、本科三年生のとき、哲学特殊としては、「ヘヤマン・コヘンの哲学」と題する講義をされた伊藤吉之助先生であつたが、学年の途中で本塾留学生として渡欧されたにも拘らず、帰朝後はやがて桑木先生の後を受けて東大の講座を兼担することになり、二年後には完全に東大の方が本務となり、本塾の方が兼務となつてしまつたのである。

以上は主として純哲方面の事柄であるが、教育学になると、初めは稲垣末松先生が、一流の要領のよい明快な講義をされたのであつたが、後には新帰朝の小林澄兄先生が担当され、先生お得意の労作教育学を講述され、わが国の教育界に新風を吹き込み、大いに活躍されるに至つたことは周知の通りである。

その頃の哲学科の本科生は極めて少なく、恐らく全体で七・八名に過ぎなかつたと思われるが、川合先生はよく「哲学科は、学生より教員の方が多いい位だから、君達をすべて留学でもさせてしまつた方が慶応にとって余程得な位だ」と冗談をとばして居られたことがあつたが、先生の民族心理学は、ヴント張りのところが多かつたが、極めて興味深いユニークな講義で、これが上梓されなかつたのは、返えず返えずも心残りであつた。その頃「人生と表現」の関係者のうちには、先生を神様扱いにしていた者があつたという噂を聞いたこともある。

あの飄逸なヨネ・ノグチの独特な英詩の講義や馬場孤蝶の談論風発的な大陸文学の講義振りに至つては、今憶い出しても懐しいものの一つであつて、小宮豊隆や茅野蕭々の独文学の講義の如きは、何れかと云えば、対蹠的な感じを受けるもので、夫れ夫れの個性に基づく興趣深いものであつた。加之、小宮先生は、当時としては人目をそば立たせるに足る一種のダンデーで、スマートな容姿に細身のステッキを小わきにかかえ、ナメシ皮の手袋をはめて颯爽とやつて来られたのは印象的であつた。しかしその小宮先生を初め、小山、阿部其他の二・三の先生が相次いで東北大学へ移られてしまつたのは、措しみてもお余りあることであつた。

かように、当時の哲学科の、学科課程は、前にも述べたように、相当に幅広く、純文の科目を少なくとも五、六科目は必修しなければならなかつたが、今から考えて見ると、かように幅の広い専門的教養を学部で身につけることが出来、後々になつて非常に役に立つた。これらの点にも、今後の学則改正にとって参考にすべきところが尠なからずあるのではなからうかと考えられる。

4

さて次ぎは、普通部時代から私にとって忘れることの出来ない沢木四方吉先生のことである。先生は、大正5年頃欧州留学から帰朝され、黒づくめのスマートな服装で、独逸のプロフェッサァが好んで用いる黒の書類入れを小わきにかかえ、気取つた足どりで三田四国町の下宿と山の上とを往復されるのをよくお見かけした。

私が本科に進むと、早速西洋美術史を受講することになり、教室ばかりでなく下宿へも度々押しかけて行き、よく昼飯を御馳走になりながら、欧州各国の美術界の消息を中心に、口角泡をとばしつつ、立て続けに独りで三、四時間もしゃべられたことも一再に止まらなかつた。

先生の西洋美術史は、哲学的美学に立脚するというよりは、むしろ先生一流の美術史眼に基き、文化史的背景を顧慮しつつ、いちいち美術作品のモチーフや制作の過程を分析し、そうしてその出来栄えを総合的立場から究明しつつ、其の間相当辛辣な批評をも加えるという具合にして講義を進めて行つたのであるが、美術の秋に

なると、わざわざ私共を展覧会場に案内して、実物について、作品そのもののねらいから、作者の創作態度やその過程を分析し、構図や色彩の配合に至るまで、われわれ素人にも十分納得の行くまで解明し、作品の出来栄えについても実証的に批判し説明してくれたものである。このことが非常に参考になつて、その後、作品を鑑賞するに当つても、余り見当違いをしないですむようになったのも、そのお蔭であると私は信じている。森鷗外や上田敏が、その頃先生の美術批評に共鳴し、わが国の美術批評界に一新生面を拓けるものと激賞されたのも、敢て不思議ではない。従つて先生の講義には、相当数の学生が何時も熱心に聴講されていたことを覚えている。

殊に永井荷風が、大正5年3月に、病弱の故を以て、本塾教授の職を正式に辞任されるや、先生の帰朝を待つて文学科の改革運動が起るとともに、先生は当局の推薦によつて、三田文学の主幹となり、これを主宰することになつた。先生は、かつて熱心な寄稿者の一人であつたにも拘らず、在来の荷風の編輯方針に飽き足らず、今後の三田文学は、単に文芸作品のみならず、文芸批評や哲学の論文をも掲載して新機軸を拓き、大いに新風を吹き込もうとしたように見受けられた。加之、荷風なきあとの純文科に活を入れる意味もあつてか、ひそかに芥川龍之助に白羽の矢を立て、同氏を塾の教授に迎えんものと交渉していたが、本人は頑として応じてくれないと、時々私にもらしておられた。

けれども、先生の新しい編輯方針は、必ずしも在来の三田文学同人の間に異論がなかつた訳ではないのであつたが、先生は、一流の「我」を通して、己れの信ずる途を一路邁進して行つたのである。尤もこれは、塾の当局者が全面的にバックしていたせいもあつたろうと思われる。

私が大学を卒業した頃は、恰度そうした時で、やがて哲学方面の堅い論文の編輯助手のような役目を仰せつかり、川合先生を初めいろいろの方々に、その方面の論文を依頼して集めることになつて、一時は可成順調にすべり出したのであるが、新進の連中が一人逝き二人逝きして、漸次三田文学的の論文が集りにくくなり、かてて加えて先生の健康も思わしくなく、その上に学内の情勢も一変し、三田文学はついに大正14年2月を以て一時休刊することになつたのである。

このことが直接間接に機縁となつて、大正9年新大学令により、正式の大学になつた以上、アカデミックに徹底すべきであるという空気が一層拍車をかけられた形となり、哲学科内部に於ても、文学部が哲、史、文の三学科に分れている以上、何時までも三田文学に依存することは、本来の目的達成から見ると邪道であるとなし、史学のように、独立の機関誌を持つべきであるという議論が圧倒的になつて来て、当局へもその旨要請すると即座に承諾され、いよいよ各学科別に発表機関を持つことになつたのである。

このことについては、水上瀧太郎氏が、「三田文学の復活」という題の下に、大正15年3月、前後九回に亘つて時事新報に於て論難され、且つ同文は、三田文学復活号にも再録されているので、すでに周知のことであるから、今更むし返えすこともし度くないのであるが、三田文学に対しては、私が哲学科では最も密接な関係者であつたから、この機会に一言だけ弁明して置き度いと思う。

それは、学内情勢や当局の心境の変化に根ざす誤解や曲解から、お互の立場を理解することが出来ず、補助金が減つたのは哲学会の策動かのように信じ、当局へ向けべきものを、私共の方へ向つて攻撃して来たことである。私共誰れ一人として、「哲学」を発刊するに当つて、三田文学への補助金を減額するようなことは一言たりとも口に出したこともないし、また策動した覚えもなく、この点は一つに塾当局の独自の決定であることをはつきりお断りしておき度いと思うのである。

かような経緯から、三田哲学会では、関係教授を中心として何回か会合を重ねて規約を作り、機関誌名を慎重審議の結果、最後は、私の腹案通り、「哲学」ということに落付いたのである。私は大正15年の秋、義塾留学生として渡欧することになつたので、予科生時代から幹事役を勤めて来た関係上、三田哲学会の名簿を整理して、帰国するまで一時島原先生に委託して旅立つことになつた。かくして、三田哲学会は、大正15年10月、始めて「哲学」第1輯を刊行するに至つたのである。

5

その頃欧州へ留学するには、二た通りの途があつた。一つは船で行くか、他はシベリア鉄道によるかであつた。私は小池隆一君と同道して、日本郵船の榛名丸で印

度洋を通り、各地の人情風俗をゆつくり見物しながら、カイロを見て、マルセーユに上陸し、パリに二週間程滞在してベルリンへ着いたのは、大正15年12月の中旬頃であつたように記憶する。

マルセーユ港へは、故島田久吉君がわざわざパリから迎えに出ていてくれたので、何等まごつくことなく、しかもマルセーユやパリでは、ヨーロッパ生活の表裏を初め、見るべきものは殆んどすべて案内してくれたので、その後欧州各国何処へ行つても、一向に驚かずにすんだ。これは一重に通人島田君の並々ならぬ配慮のお蔭であつたと云わなければなるまい。

船では学習院の野村行一君達と、機関長をホストとするテーブルで一カ月程食事を共にしたのであるが、同君は天衣無縫というか、天真爛漫というか、端でエチケットを余りやかましく云う人があると、わざとスープなどを音を立てて喰べ。船室のカレンダーに一枚めくる毎にあと何日過ぎれば日本へ帰れるかと、赤鉛筆で日数を印し、「何も留学などは為たくなかつたのであるが、後輩が困るので出て来たのだ」と嘯いていた。後にベルリンで時々逢う機会があつたが、成程野村君の独逸語は堂に入つたもので、専門の学問を研究するだけが、留学の唯一の目的であるならば、今更留学の必要はなかつたかも知れない。

然るに、此の野村君が、後には厳しい東宮太夫となり、小泉先生と東宮仮御所でゲーテの伊太利亜紀行を原文で読んで居られた光景を思い浮べると、思わず微笑を禁じ得ないものがある。同君が逝去する一年位前、羽田空港で久しぶりにお目にかかつて、しばらく立話をして別れたのが最後となつてしまった。まことに惜しい人であつた。

当時ベルリンには、日本人は頗る大勢居て、塾の留学生としては、後には多くなつたのであるが、当座は奥井、浅井、金原の三君位であつた。ところが鴨が葱を背負つてはるばるやつて来るのを今や遅しと首を長くして待つていた様子を後できいて、思わず吹き出さずには居られなかつた。その頃フランの方は十銭前後で頗る安かつたにも拘らず、マルクの方は一応安定し、四十七、八銭の相場が普通であつたが、かつてのインフレーションの余影が、日本人と見れば皆金持扱いをされ、何処へ行つても優待されたが、汽車の切符売などは、つり銭をごまかす位はまだ何んとも

思っていなかつた時代であつた。

私は最初ベルリンに半年余り滞在し、大学附属の外人向独逸語学校に三カ月程通う傍ら、大学ではハンス・マイヤーの哲学史の講義をのぞいたり、古本屋廻りや博物館などを見て日を送つて居たが、風邪から気管支加答児に罹り、偶々ベルリンに滞在していた東北大学内科の大家熊谷教授の診断を受け、そのすすめでチュウリゲンワルドのケーゼン温泉に転地して一カ月程そこに滞在して静養した。そこでは独逸式に鉱泉を水車で汲み上げ、小枝を積み上げて並べたところに撒きちらし、霧滴の立ち込める散歩道を一日三、四回歩いたり、附近の起伏の多い岡の林の小径を辿つて古城の跡をたづね、又は一里ばかり離れたところにある、ニーチェやランケ等多くの有名な学者がかつて学んだ伝統の古いギムナジウムを訪づれ、エリザベート・ニーチェの書いた伝記に出て来る少年時代のニーチェの面影などをはるかに偲び、静養の傍ら、神田の東光書館から刊行する「現代哲学の動向」という著作の校正などをして日を過ごした。坦々たる国道の両側には、桜んぼの実が枝もたわわに鈴なりになつている大樹の並木が見渡す限り植えられているのに、誰一人悪戯もしないで熟するのを待つている有様を見て、少なからず感嘆したものである。流石に独逸人だなと思つて、通りすがりの農夫にきいて見ると、これらは皆村有で、お互に注意し合つているせいであろうと云つていた。それにしても公衆道徳の点では、わが国などはまだまだ足元にも及びもつかないと痛感した。

私は、夏も大分暑くなつて来たので、清涼なアルプスの国、スイスへ向い、ジュネーヴの西南端にある小綺麗なボウ・セジュールに落付いた。ここは、かつて新渡戸博士が国際連盟の事務局次長時代に、数年間に亘つて滞在していたところであり、現在は参議院の重鎮である佐藤尚武氏がその頃国連公使として家族同伴で住んで居られた。此のホテルは、長期滞在客ばかりで、紹介者が確かでなければ泊めないの、至つて閑静優雅で、療養者にも行き届いた設備もあり、しかも格安であるが、食事はうまく、サービスも上々で、私共日本人に対しては新渡戸博士のお蔭であるか、特に親切を極めていたので、二週間位と思つたのが遂々三週間余り滞在してしまつた。大学や国連などを見学したり、湖水廻りなどをしているうちに、世界教育会議の日本代表として出席される小林先生が来着されて、数日間滞在されたのも

此のホテルであつた。

スイスは、周知の如く、山岳国で酪農を主とし、精密機械工業も発達し、文化も相当高いが、人情風俗は至つて純朴で、独、仏、伊語が地方によつて主に行われ、鉄道の掲示は必ず三カ国語で表示され、ステーションには日本のような改札口はなく、自由にプラットフォームに出入出来、しかも汽車の発着は正確無比を極め、到底正確を尊ぶドイツですら遠く及ぶところではないように思われた。

私は八月末頃までスイス各地を転々として見学して廻り、ユングフラウに登るためにインターラーケンのホテルに泊つたとき、ベルリン大使館から回送してくれた故国の新聞を見て、芥川龍之介が作家としての行づまりから自殺してしまつた記事を読み、その夜は人生の如何に儚ないかを嘆息しつつ寝についたが、到底安眠することが出来なかつた。殊に芥川は、私の愛読していた作家の一人であつたので、異常なショックを受けたせいであつたろうと考えられる。

私は三カ月に亘る静養旅行のお蔭で全く健康が恢復したので、ベルリンへ帰る途中、有名なシュワルツワルドの麓に在る大学都市フライブルクに、フッサル老教授を訪つね、冬学期から講義とゼミナールに出席する許可を受けて、ベルリンに残して来た荷物の整理をして、九月上旬フライブルクへ転住したのである。

当時の独逸の大学は、正式の学生であるならば、一定の学習基本料の外に、科目別履修料を別に支払う建前になつて居つて、これは担当教授の収入になるのであつた。従つて教授間の収入格差は、聴講者の数如何によつて夫れ夫れ異つていたが、大家の科目履修料は安く、若い私講師の担当科目程高くなつていたのである。之れは聴講者が著るしく少くないのが普通であるからであらう。加之、ゲハイムラー卜のような称号を持つた老大家は、無料の公開講座を每学期必ず一科目は担当する慣習になつていたが、定年退職後も、その頃の大学教授は、死に至るまで本給だけは年金として受けていたのである。この点流石は学問尊重のお国柄であつて、わが国などに比較すると、まことに別天地の感があつた。

けれどもドイツの有名な学者は、皆非常な努力家で、しかも自信が強く、一つの学派を樹立すれば、自他共に尊重し、お互に一步も譲らぬ頑固さも備えていた。

私の恩師のフッサル老教授なども此の例にもれず、現代初頭からいわゆる現象学

派なる一派を拓き、しかも自分では、これが哲学だと、一義的に云える様な厳密学であつて、一切の他の基礎学になるのだという強い自信を持ち、いわゆる世界観哲学や形而上学を一切排除して、飽くまで自説を押し通し、自分のところへ来る学徒は、必ず現象学の本質を体得し、自分の亜流になるのが当然であるかの如く揚言していた位である。

フッサルの講義は、何時も大講堂で行われ、原稿を用意して置いて分り易く説いて行くというやり方であつたが、セミナールの方は極めて厳格で、出席者は多くても十二、三名を出でず、テキストによつて順番をきめ、報告をさせた後、質問しながら繰り返えし巻き返えし問題を掘り下げて行くのであるが、私は二学期間出たのであつたが、お歳を召した関係か、割合に穏やかであつたようであつた。しかし或る日、ライブチヒでドクターを取つて来た学生が居て、最初から現象学に対し批判的な態度をとつたところ、フッサルは珍らしく顔を真赤にして怒り出し、「君は出て行き給え、君のような異端者は自分のところへ来る必要がない」と叫んで追いつ出してしまつたことを覚えている。之れに類似したことは、最近物故された高橋里美氏にもあつたかのような噂が学生間に流布されていたが、真相は務台理作氏にでもきかなければ分らない。

私は翌年の夏学期の終り、即ちフッサル老教授が定年退職されるまで、何呉れとなく御厄介になり、同志社の浜田君とよく連れ立つてフッサル宅を訪づれ、今日までの講義の原稿などもいろいろ拝借し、ワイナハトには町重なお招きを受けたものであつた。夏学期の中頃、フッサル宅でパーティが開かれている最中、電報が届いて「今マックス・シェーラーが逝去された」と私共に伝えられ、一瞬冥福を祈るように天を仰いで嘆息されて居られた様子であつたが、「シェーラーはすぐれた学者ではあつたが、真の現象学者ではなかつた。むしろカッシーラーの方が私の学説に近い位だ」と泌みじみ語られたことを今でもはつきり覚えている。

実を云えば、私は最初マックス・シェーラーについて勉強するつもりで、わざわざケルン大学へ行つて見たところ、すでに彼は、フランクフルト・アム・マインの新しい大学に赴任された後で、しかも病に倒れたまま一度も教壇に立たずして長逝されてしまつたので、私にとってはひとしお愛措の念の切なるものがあつた。

フッサルがシェーラーを指して真の現象学者ではなかつたと云つた意味は、シェーラーが本質直観に重きをおいて、本来の現象学的還元を無視し去つたからであつて、私にはそれ程までに云う必要がなかつたように思われた。フッサルの晩年になつても、フッサル流の現象学では、生ける現実社会の実相を、如実に解明することは至難であると云つて差支えないであろう。

当時の独逸の哲学界は、新カント学派としての西南独逸学派やマールブルク学派、それに現象学派やネオ・トミズムスの一派等が、大体代表的のものと云わるべきもので、フッサルの現象学と雖も、先生自身が目ざしたように、これが哲学だと現象学を云い切ることが出来るかどうか、その頃でも私は疑わざるを得なかつた。従つてロンドンへ立つときお別れにフッサル老教授宅を訪ねてお分れの握手をしたとき「君は日本へ帰つても現象学者になるか」と問われたとき、「出来るだけ努力するつもりです」と返答して出て来ざるを得なかつた。(理想、拙稿「エドムント・フッサルの横顔」参照) それ位フッサルに限らず独逸の学者は、自説に対して自信満々たるものがあつた。これは一面偏狭の譏りは免れないかも知れないが、私共にとつては、頂門の一針とも云わるべき性質のものではなからうか。フッサルの後任は、結局ハイデッガーが推挙され、十数年の間その光榮ある椅子に就いていたが、戦後追放されて、現在では私共の同窓のフィンクが、哲学と教育学の教授になつて後を継いでいる。

私は春休みや夏休みを利用して、前後半年余り欧州各国を見学し、身を以て夫れ夫れの国々の文化や人情風俗を体験し、見聞を広めて、モスクワに二、三日滞留の上、シベリヤ鉄道により、昭和3年12月末帰朝したのであつたが、私が日本に着く二、三日、「ゲブデン・イトウ」という独逸文の電報がベルリンから着いたので、留守宅では大騒ぎになり、私の身体に何か事故でもあつたのではないかと大いに心配していたところへ帰つたので大笑になつたのであるが、親戚のあわて者が「ゲブデン・イトウ」と読んで拘留されたのだらうということになつたそうである。しかし、実は経済の伊藤君がスリに取られた信用状が発見されたのを通知して来たのを誤解し、曲解したところから起つた一場の悲喜劇に終つたのは幸であつた。

海外留学なるものは、単に専門の研究に対してのみならず、見聞を広め、遠く異

国から客観的に日本の実力や実態を知り、却つて真の意味で祖国愛の心持ちを起こさせるに至るものだと確信している。それには少くとも二、三年滞在して、じっくり海外生活を味識することが最も効果的であると断言して憚らない。

6

私は歐洲留学に出発するに先だつて、寄宿舎時代の親友、福原例君の従妹、新井操と青木徹二博士御夫妻の媒酌により結婚し、江戸見坂上に新家庭を営むことになつた。

妻は、新井古芳と同竹子との間に生れた二男三女の末女であつて、父古芳の死亡後は、母の郷里、山口県長府で育ち、当地の県立長府高等女学校を卒業した。私の帰朝後、昭和5年の夏、長女礼子が生れたが、その後数年間は病床にある妻とかよわい未熟児を抱えて一方ならぬ苦勞をした。しかし、幸い大阪回生病院の長兄の献身的援助と助言とによつて、母子とも奇跡的に健康体となり、その後は恙なく日を送ることになつた。礼子は、幼稚園から高等部まで、一貫して東洋英和女学院に学び、大戦中一時郷里に疎開のため半年近く休学したが、終戦後直ちに復校してそこを卒業することが出来たのは喜ばしいことであつた。

昭和34年4月、渡辺芳一を養嗣子に迎え、長女礼子と結婚せしめ、やがて一彦、乙彦の二人の孫を得ることになつた。養嗣子芳一は、東京都出身の渡辺一郎、リンの間に生れた長男であつたが、両親とも早く死に分れ、祖母トリの手塩にかけられて育つた、いわゆる「おばあさん子」であつた。祖父渡辺芳太郎は東大出身で、母校の教授を経て九州帝国大学の工学部長や総長を歴任し、割合に早く逝去したが、祖父系に自然科学者が多く輩出したのは、祖父の御蔭であつたと云われている。

芳一は、本塾商工学校を経て工学部応用化学科を卒業し分析化学の専攻で直ちに助手となり後に専任講師に任ぜられ、昭和38年3月には工学博士の学位を受け、同年8月には、本塾福沢諭吉記念基金の留学生として渡米し、目下ボストンのマサチューセッツ工科大学の地質化学教室で折角研究中であつて、昭和40年8月には帰国の上母校に復帰する予定になつている。従つて私共の家庭は、老若二組の夫婦と孫二人の都合六人の暮しで、なかなかにぎやかなものである。

かように、今こそは平和な家庭生活を楽しんでいるが、太平洋戦争が熾烈になつた末期になると、私は、大学の外に、普通部のみならず、山の上の商工学校、商業学校から、遠く日吉の藤原工業学校に至る四校の主任を兼務することになり、いわば塾の中等部総長のようなものだね、とよく同僚に冷かされたものであつたが、当人の私には到底そんな笑い事でなく、各地区防護責任者の一人であつて、何か事故があれば、夜中と雖も駆けつけねばならず、三田まで歩いて僅か二十分足らずのところを、三、四時間も費やして一日三往復もした経験があつた位で、あと半年終戦が遅くれたら、私の身体は到底保たなかつたと、今思い出してもぞつとする位である。大戦中の回想は、数々の悲惨事に満ち溢れているので、出来る限り意識的に憶い出さぬことにしているのであるが、去る昭和20年の5月24日の夜、塾長小泉先生は焼夷弾の直撃を受けて重傷のため御入院になり、三田山上の校舎は鉄筋コンクリート建てを残して全部烏有に帰し、塾全般から見ても約三分の二の建物は焼かれ、一時は全く途方に暮れたものであつたが、幸い塾長小泉先生も永い療養生活の結果御元気になられ、現在では建物も、スペース的には終戦直後の六倍にも達し、大学生は二万数千名を数える盛況を呈しているのを思うと、全く夢のように感ぜられてならない。

私は不思議な廻り合せで、昭和22年の初夏、一面焼野原のような三田山上で、しかも強風の吹きまくるさなか、野天に天幕を張つて一応舞台を作り、天皇陛下をお迎えして、本塾創立九十年祭を挙行了たときも、実施本部長に選ばれ、その後11年目の昭和33年11月8日、日吉に新築された堂々たる記念館に於て、同じく陛下の御出を願つて、内外の貴顕紳士は勿論、社中一同、厳粛のうちにも頗る豪華盛大極りなき創立百年記念式典を執り行つたときも、式典委員長の重責を委嘱され、幸い夜来の雨もすっかり上つて好天気に恵ぐまれ、大成功裡に終つたときは、文字通り感無量で、思わず金原君達と握手をせずに居られなかつた。之れも一重に組織の力とスタッフ全員の一致協力のお蔭であつて、私の生涯忘れることの出来ない喜びであつた。

此の外、福沢先生誕生百二十五年記念の意味をも含めて、アジア財団の並々ならぬ援助を受け、昭和35年10月アジア教育者会議を本塾大学主催の下に挙行了た際も、

実行委員長に推され、これまた予想以上の成果を収めて終つたことは、塾当局の温い理解は云うまでもないが、一つに関係者各位、殊に裏方の役目を引受けてくれた多くのスタッフの、周匡にして不眠不休の超人的協力の賜であると云わざるを得ない。私にとっては非常によい経験であつたとともに、アジア各国にわが慶応義塾大学の存在を明かにし、将来文化の交流やその他のためにも、測り知れない尊い土台を築いたものと信じて疑わない。今から顧みれば、半歳に亘る永い準備と並々ならぬ苦勞も、却ってなつかしい思い出となつている。

7

私は、四十代位までは徹夜を一晩や二晩続けて原稿を書いても何んともなかつたので、その頃は頼まれれば専門雑誌は勿論、新聞や専門外の雑誌えでも数多く寄稿したものであるが、最近リストを作る必要上調査して見ると、殆んど大部分の資料は散逸して見当らず、図書館や知人に頼んで調べて貰つても正確を期することが出来ないので、この記念号には年表式のリストはやめにして、ただ略歴風のものを人に頼んで作つて貰い、それを附けることで許して頂くことにした。実を云えば、或はその位が恰度よいのではあるまいかとも考えられるのである。

私は終戦後は、常任理事を二回、それから通信教育部長や文学部長も数年兼務したので、学内だけでも相当多忙を極めたにも拘らず、学外に於ては、占領政策に伴い、文部省関係や其他の協会の委員等をいろいろ引受け、日夜公務のため、東奔西走、席の暖まる暇がなかつた。しかも敗戦後のわが国の状態は、家は焼かれ、食物も満足になく、風呂さえもろくに這入ることも出来ない頃であつたから、文部省の会議などに出かけて見ると、時折り何とも云われぬいやな臭いが室内に充満し、大いに閉口したものである。これは、安煙草に身体の汗や垢の臭いの混交したものであつたらしい。エアコンの整備された会議室で悠々と会議の出来る昨今から見れば夢のような話である。

私が終戦後初めて文部省に関係するようになったのは、恐らく昭和21年6月頃、中央適格審査委員会が設置され、その委員に推挙されたときであつたと記憶する。

これは G. H. Q. から矢継早やに出された、例の追放令によつて設けられたもので、学長クラスの適不適を書類によつて審査決定する委員会であつて、確か宮本和吉氏が委員長ではなかつたかと推量するのであるが、これ程敗戦のみじめさを身を以て思い知らされたことはなかつた。苟も日本人であるならば、一旦戦争が初まつた以上、理否の如何を問はず、勝ち抜くために努力するのが当然ではないか、という気持ちで大部分の委員の腹の底にはあつたに拘らず、簡条書でいちいち該当すべき事項が列挙されている以上、どうすることも出来なかつた。最初は出来るだけ速やかに終結するつもりであつたが、相当長延いたようにも記憶している。幸い私は、この外は、大抵大学設置の問題や基準の問題或は教育や研究に関する委員ばかりであつたから、左程後味の悪いものは、そうなかつたのであるが、その日の暮しにも困り、食物を満足に手に入れて生命をつなぐのが精一杯な頃で、国民一般がいまだ一種の虚脱状態から脱けきらない時代であつたから、大学設置に関しても、笑えない様な悲喜劇が随所に見られた。

例えば、昭和24年以降数年間は、国公立を問はず、毎年相当数の大学が設置されたので、神田の古本の値段が一夜のうちに飛び上つたこともあるし、丸善などにリストも渡さず見計いで五、六千冊至急届ける様にと注文する不見識な学校すら出て来る仕末であつた。古本トラック一台一週間の貸賃が五万円位が通り相場だという噂が、まことしやかに流布されたのもその頃であつた。何んとかして実地視察の委員の眼をごまかして、審査にパスすることのみ汲々としている無定見な学校当局者のみじめな姿を今でもありありと憶い出すことがある。大学基準は最低基準であり、殊に設置基準はそれを更に緩和したものであつて、多少の不備な点があろうとも、当局者がはつきりした大学理念を持ち、総合的に見て近い将来大学らしくなる見通しが付けばよいのであるが、施設設備にしる教員組織にしる、国立ですら地方の大学などになると、之れで大学になろうとするのかと驚かざるを得ないような、甚だお寒いものが多々あつたことを知つて、ただただ啞然たらざるを得なかつた。況や公私立に於ておやである。大学設置審査は、周知の通り、書類審査と実地視察の二本立てで、書類が如何に整つて居つても、実地視察に行つて見ると、大学の風格などは全くなく、之れが学校の校舎かと思われるような馬小屋のような建物を見

せられた上、校地の狭いところでは、一時間も自動車で引廻されたあげく、田畑や山林に、某大学建築予定地の棒杭だけのところを見せられて、何れここへ校舎や運動場を新設することになっているとか、寄附金の奉賀帳をうやうやしく見せられ、これこれの有名人達が年度末までにはこれこれの金額になるよう寄附されることになっているとか、当にすることの出来ないものを審査の資料に加えて、何んとかパスさせ度い、然らずんば寄附金は一文も集らないと、全く本末顛倒のことを陳情する当局者もあつた。尤も最近の新聞紙上の伝えるところによれば、それが確かだと委員が認定すれば、此際大学設置を認めてもよいではないかと文部当局が云つたとか云わなかつたとか冷やかし半分を書いて居つた。最近の傾向として大分甘くなつたから或は来年辺りからこんな風なこともあり得るかも知れない。それはとにかくとして、強迫がましいことやあの手この手で懐柔策を弄することは、云うまでもなく、中には学内の派閥争いを審議会へ持ち込んで来るに至つては言語同断と云わざるを得なかつた。

之れは、大学院のことであるが、ある有名な学者は毎年異つた大学へ転じて、準備委員長の如き肩書付の名刺を振り廻し、当局との懇談の席上にも列席し、平然としている有様で、道義的に許さるべき事でないので、専門分科会ではブラックリストを作つて置き、そういう学者は学問はともかく人格的に不適格故、ノーカウントとする慣習を作り、審査をしたこともあつたが、しかし、これらは皆、敗戦による異常心理のゆがみの発露と見れば、左程青筋を立ててとがめ立てするに及ばぬことであつたかも知れない。

一体、私の審査に対する信条は、国公立の別なく、一つでも大学らしい大学を認めるのを第一義となし、然らざるものは、もつとよく準備してから更めて申請しなさい。それが学生のためでもあり、学校自身のためですよ、と何時も申述べていたのであるが、いくつかの審査会に分れて審査をする関係上、各審査会の書類を整理する事務官達が持ち寄つて予め調整すると、最大公約数というより、一番低いところ、即ち甘いところを標準にして出来るだけ自分の関与している学校の合格を計るという空気が強くなり、誰が見ても不合格と思われていた学校が、総会の席上では、沢山の条件をつけて一応パスさせるということになつて、私は民主主義の悪い

面をはつきり見せつけられた感じがして、非常にいやな気持ちがし、一時は止めてしまうかとすら思つたことさえあつた位である。中には、大学人でない方で、合と否をハッキリさせ、自分の信ずる通り、ハッキリ否なら否と投票する尊敬するに足る人もあつた。勿論投票は記名であるから、調べれば誰が否とし、合としたかすぐ分るのであるから、余程自信と勇気がない限り、日本人は長いものには巻れる式が多過ぎる様に思われる。大学人ですらまだそれだから之れでは何時までたつてもわが国には、責任のある民主主義は根付かないと云つても過言ではないであろう。

不思議にも、国立の教授連は、ひそかに委員連中に働きかけ、なるべく条件を附けることを求め、私立の当局者は、出来るだけ寛大な条件になるよう努力するのが常であつた。国立は、周知の通り、われわれ国民の血税でまかない、少しでも自分の教室、実験室を充実させようとし、私立では、自前で経営しているのであるから、一文でもお金を出さずに大学や大学院を設置し度いと思うのは、人情の自然であるから、かれこれ考え合せれば、何等不思議ではないかも知れぬ。殊に教員組織などの点になると、国立の方は極めて横着なやり方をするときがあり、最初の年度しか予算が通らないから、こうせざるを得ないのだと云つて、嘯いているところさえあつたが、私は飽くまで、国公私立対等の条件を力説して一步も譲らなかつたので、文部省の諸君から大分煙つたがられたことがあつた。否、私立側からすら却つて反対があつて、私が実地視察に行くという通知があると、予め警戒警報が出たという噂があつた位である。私は、前に述べた通り、元来が野州生れであつて、野人礼にならわず、云い度いことはズバズバと云う方の性質であつたから、自分自身ではどう思われ様と何んとも思つていながつたが、昭和35年5月に、藍綬褒章を授与するからと決定通知に接したときには、納得のゆかぬ点があつたので、後に文部省関係の某氏に、それとなく裏話を聞いて見ると、あなたの件は、省議の際特に問題として、在来の授与方針の解釈に幅を持たせる様関係官庁とも連絡し、従来のような学校や大学の理事長又学長というような狭い範囲に限定せず、大きな大学の特殊性も考慮に入れて、今後は授与するように改めたので、あなたは永く私学教育に尽瘁したという点より、大学教育の制度確立のために功績があつた点が一番買われて、決定されたので、今後、大きな大学の方々にも差上げられる途が開かれたのです、と

のお話であつたので、左様ならば有難く頂戴しても差支えないと思つた。ただ多年私学に尽瘁したというだけならば、わが塾に於てさえ私より先輩が相当沢山居られるのだから不合理なので、腹の底から納得することが出来なかつた訳なのである：

何れにしても私共の関係した当時の大学基準は占領政策の一環として、出来るだけわが国の実状ともならみ合せ、苦心の結果出来たものであるが、敗戦後すでに二十年、いろいろのひずみや問題が出て来てわが国の国情にもそぐわない点多々あることであるから、此際十分に再検討して見る時期に到達していることは云うまでもない。しかし国の教育制度というものは、そう軽々しく改変すべき筈のものでもなし、又それによつて影響するところも頗る大きいのであるから、改革するにしても余程慎重な態度で検討した上実施する必要がある。文部省では、かねて基準検討の協議会を設け、折角各方面に亘つて大学そのものを再検討しているから、一応の結論が近く出るであろうが、聞くところによれば、前向きよりも後向きの改策案が底流をなしているのではないかと疑われるふしもないとは云えないし、且つ最近ではベビー、ブームに便乗して、此際短大や大学を作つて置くことが容易であろうと曲解して非常に沢山文部省に申請している様子であるが、実際の審査に当る委員諸君は勿論のこと、取りまとめ役の主査委員の諸君の格段の勇氣と良識とに期待するところまことに切なるものがあると私は確信している。

本塾に於ても、予ねてから再検討して、近く学則改正の目途をつけ度いと折角努力中であるが、私から卒直に云わせれば、拙速主義は厳に慎しみ、学部だけ切り離さず、常に大学院とならみ合せ、いろいろの角度から、激動しつつある世界に対応する大学の新しい理念にふさわしい様改善されんことを願つて止まない。私は定年制が正式に施行されれば、来秋には現職を退く考えでいるので、尚更その感が深い。殊に本塾大学の如く、単なる学塾に止まらず、気品の泉源となり、學術上に於ても名実共に一流校の名を恥ずかしめぬためには、問題の山積している今日、当局者として、之を如何に打開して行くか、さぞかし日夜苦心慘憺しているであろうが、われわれ社中一同も協力一致して、之れを乗り切る覚悟をしなければならぬときであろうと信ずる。徒らに学内に対立的空気を醸成することなく、人の和を計り、足りない施設設備はどしどし充実し、教育と研究に専念出来る環境を作り、待

遇を改善して後顧の憂のない様に、折角の努力を願ひ度い。

このことは国に対しても同様であつて、一時的のかけ声だけに止まらず、わが国の七割の教育を担当する私学、殊に私立大学に対する画期的な抜本対策を此の際打出して、真に文化国家の為政者たるの見識と課せられた重責を完うして頂き度いと思う。然らずんば、遠からず私立大学は形骸に墮し、真に大学らしい内容の充実した大学が漸次影をひそめることは必定であろう。私はかようなことが全く杞憂に終らんことを心から祈つて止まない者である。

さて、最後に私にとつて忘れることの出来ないことが一つある。これは、昭和26年春、敗戦後初めてわが国に、すぐれた図書館員の養成を計ると同時に、本邦に於ける図書館学のセンターの役割をも果すべき、近代的図書館学校が、米国の援助により、本塾文学部内に設置されたことである。わが国に於ける四年制大学の図書館学校と称せられるものは、現在までのところ本校が唯一のものであつて、創立後数年間というものは、教授陣容は殆んど全部を米国のエキスパートに依存して居つたのであるが、創設当初から計画的に、わが国人の新進気鋭の教授陣容の育成強化に力を注ぎ、本校卒業生の中から多くの俊秀を選んで、更に米国に留学せしめ、広く海外の実状をも見聞せしめて、教授と研究能力の充実を計り、近く創立十五周年を迎えんとする昨今は、施設や教授陣容も一応整い、卒業生も数百名の多きに達し、それぞれ斯界の第一線に活躍し、ようやくその真価が認められるようになって来たのである。

しかし、図書館学校は、広く各種の大学卒業生を入学せしめて、高度の技術的学問的教育を施し、専門職能人として各方面に活躍出来る基礎的訓練を施すのが本道であつて、わが図書館学校としては、ここ数年のうちには、物心両面に亘って一段の充実整備を計り、大学院の修士課程を設置することこそ、所期の目的の一半を完うすることに至るのである。

かねてから私の描いている図書館学校の未来像は、大学院を主体とし、学部を従とすることにあるのであつて、これが米国に於ても一般的傾向であり、日進月歩の科学技術や大学図書館、専門図書館等の熾烈な要望に答え得る唯一の途であると信ずる。

このことは、私が昭和31年7月、初代主任教授のギットラー博士の退任後、はか
らずも後を受け継いで関係するようになった当初から、ひそかに描いていた青写真
であつて、専門外の私が、一步一步その準備をして居つたことは、本校のファカル
ティを中心とする研究発表機関として「ライブラリー・サイエンス」という相当量
の学術誌を定期的に刊行するに至つたのを見て頂けば、凡そ想像が出来るであらうと
思う。

勿論大学院の修士課程を設けるにしても、物心両面に亘つて更に充実強化を計る
必要があるが、如何に遅くとも、創立廿周年迄には、立派にその念願を実現した
いものだと思つて居るが、既述の通り、公式に定年制度が確立すれば、私は当然来
るべき秋には第一線から退くことになつて居るので、次代の主任者にその重責を果
して頂き度いものだと、心から祈念して、この思い出の記を擲筆することにする。

1964年(昭和39年) 師走 識